

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16872

研究課題名(和文) 玉類副葬からみた古代国家形成過程と財の流通・消費の研究

研究課題名(英文) Exchange system in ancient state formation process as seen from buried beads

研究代表者

谷澤 亜里 (Tanizawa, Ari)

九州大学・附属図書館・助教

研究者番号：50749471

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、弥生時代から古墳時代の玉類について、副葬時の使用方法やセット構成に着目して流通・消費の具体像を検討した。その結果、弥生時代後期に玉類は地域社会で組み合わせられるパーツとして流通していたが、古墳時代前期には装飾品を構成するセットの状態で見畿中核から配布されることを明らかにした。このことから、古墳時代の開始とともに玉類の流通が広域的な政治秩序の再生産のための戦略的な物財の授受に組み込まれたことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reconstruct the exchange system of beads during the Yayoi and Kofun period by examining their usage and assemblage as adornment or mortuary goods. As a result, following 2 point was revealed: 1) in the Late Yayoi period, the beads were exchanged as parts of adornment and adornments were mainly made in each regional society, in contrast, 2) in the Early Kofun period, some kinds of beads were distributed as high-rank body adornment from the political center in the Kinki region. The results suggests that the exchange of beads became as a part of prestige goods system for retaining the inter-regional relationship in which the Kinki region take a central position.

研究分野：考古学

キーワード：玉類 流通 副葬 弥生時代 古墳時代

1. 研究開始当初の背景

日本列島弥生時代から古墳時代は、後の律令国家の基盤となる社会機構の形成が進んだ時期である。このような古代国家形成過程において、社会関係の形成・維持・変容に物財の流通がどのような役割を果たしたかという問題は、重要な研究課題である。当該時期においては特に、弥生時代における青銅器や、弥生時代後半期以降における銅鏡や鉄素材、鉄製武器類、古墳時代における武具類などが注目され研究されてきた。

当該時期を通じ副葬品として普遍的に使用される玉類は、以上のような視点から研究されることは少なかったが、近年、玉類の材質・構造調査が進展し(肥塚 1995, 藁科 1994)、法量分析手法が向上(大賀 2001)したことで、消費地出土の玉類を分類し、その生産地を限定することが可能となった。そのうえで、各分類単位の空間的分布から、流通状況が解明されつつある(大賀 2010 など)。しかし、これらの玉類がどのようなメカニズムにより流通・消費されたのかは未解明の部分も多い。

一方、申請者はこれまで、弥生時代後期から古墳時代前期の玉類について、材質の化学分析調査、生産地の異同を反映するような分類単位の析出、空間的分布、墓地内における分布の検討を行い、以下の成果を得ていた。

x) 舶載玉類の流入動向は列島外の情勢に大きな影響を受けており、その変化が列島内での流通ネットワークの変化に結び付いている。

y) 各種玉類の分布状況は、墳丘墓や古墳の展開状況と連動しており、列島内における社会関係の媒介アイテムとしての側面も、分布の様態に影響する。

以上は、玉類の流通・消費の様態に列島外の情勢という外的要因のみならず、列島内の社会戦略という内的要因も関与しており、弥生時代から古墳時代を通じて、その実態の解明が求められることを示唆する。すなわち、玉類の分類・分布に加えて、消費様態から読み取れる諸情報を分析することで、その流通・消費の実態をより適切に理解できるといふ予察が得られた。

以上の背景をふまえ、本研究は、玉類の空間的分布の検討のみならず、副葬様態から読み取れる諸情報の分析を行うことで、当該時期の玉類の流通・消費の具体像を明らかにし、それが社会関係の再生産・変容過程にどのような機能を果たしたのかを解明することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目標は、日本列島弥生時代から古墳時代の玉類の流通・消費の具体像を通時的に復元し、当該期の古代国家形成プロセスに、物質文化としての玉類が果たした機能を明らかにすることである。本研究の特色は、これまで個体を単位に分析されてきた玉類を、

一連の装飾品を構成するセットの単位で分析する点にある。具体的な課題として以下の3点を設定した。

(1) 使用形態と被葬者の属性の分析から玉類副葬の規範を明らかにすることで、玉類の分布現象の背後にあるさまざまな戦略性と、それに媒介された社会関係へアプローチする。

(2) セットを単位に分割・再構成の有無や伝世品の組み込まれ方等を分析することで、玉類が入手され副葬に至る過程を具体的に明らかにする。

(3) 1)・2)の結果を通時的に整理し、他の考古学的事実と比較することで、当該時期の社会変化に、玉類の流通・消費が担った機能を、より実態に即して考察する。

3. 研究の方法

以上で設定した3点の課題について、具体的に以下の方法で検討を進めた。

(1) 玉類の副葬規範の解明

① 玉類の副葬に関わる属性の調査・資料化: 発掘調査報告の記述、図面、写真などを収集・検討し、玉類がどのように副葬されたかに関する属性を抽出、データ化する。検討項目は、玉類の副葬位置、着装状態と考えられるかどうか、器種構成、色彩構成などであり、共伴遺物・人骨や埋葬施設などの情報もここでデータ化する。

② 玉類の副葬形態と被葬者の属性との相関関係の検討 共伴する人骨の性別や年齢、共伴する副葬品の種類と数量、埋葬施設の規模や種類、他の埋葬主体との関係や墓の外表面施設などから復元される被葬者の特徴が、①で抽出されたヴァリエーションがとどのような関係にあるかを分析する。ジェンダーについては、共伴人骨の性別や、男女差を示すことが明確とされる副葬品との相関様態を明らかにする。階層性については、玉類の出土した墓の墳丘や埋葬施設の種類や規模、墓域内で占める位置、共伴する副葬品の質と量などとの相関様態を明らかにする。要素間の相関関係の分析には、多変量解析の諸方法を適切に適用する。以上を通じ、玉類の流通の背景にある消費時の規範を明らかにする。

(2) 玉類の入手・管理形態の解明

① 玉類の製作に関わる属性の調査・資料化: 材質の種類、製作技法、法量、形態など、製作時に付与される諸属性の観察により、個々の玉類がいつどこで製作されたかを検討する。

② 玉類のセット構成の検討: ひとつの墓に副葬された玉類セットの構成を、製作地・製作時期に着目して検討する。具体的には、ほぼ同時期に同一の製作地で製作されたとみられる玉類で構成されるものから、製作時期や製作地が雑多な玉類で構成されるものまで、ヴァリエーションが存在すると予想され、

このヴァリエーションがどのようにパターン化でき、それぞれどのような入手・管理形態が復元されるかを検討する。そのうえで、墓の階層性、そのほかの副葬品の入手様態、生産地との地理的位置等との関係を分析し、その要因を検討する。

(3) 現象の通時変化とその他の物質文化動態との関係の解明

1)・2)の結果を通時的に整理して相互の関係にあるかを検討し、玉類の流通・消費の実態とその時期的変化を明らかにする。また、これまでに明らかにされている墓地や集落の展開状況、他の物財の流通状況など、他の考古資料の動態と比較し、それぞれの画期の整合・不整合を調べる。以上を通じ、当該時期の社会変化において玉類の流通・消費が果たした役割を明確にする。

4. 研究成果

研究の結果、特に弥生時代後期後半～終末期の様相と古墳時代前期の様相との相違が明確となった。

(1) 玉類の副葬規範に関する検討結果

弥生時代後期～終末期においては、埋葬される墓の階層性との関係から、大型の勾玉や舶載品の管玉がより上位の埋葬に伴う傾向があるが、副葬される玉類の内容構成に地域差が大きい。

一方、古墳時代前期においては、翡翠製勾玉+半島系管玉のセットが安定的に確認され、より上位の埋葬に、上半身の身体装飾として用いられる傾向が明らかとなった(図1)。

以上から、古墳時代の開始とともに、翡翠製勾玉+半島系管玉をより高く価値づける玉類の体系が列島広域で共有されるようになることが明らかとなった。

なお、主な分析対象とした弥生時代後期～古墳時代前期のなかでは、被葬者のジェンダーや年齢と特定の玉類の内容とに明確な相関は認められなかった。

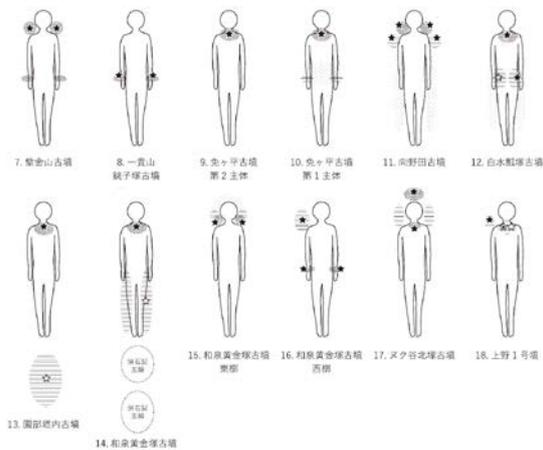


図1 前期古墳における玉類の副葬位置と内容(論文① 谷澤2016より)

(2) 玉類の入手・管理形態に関する検討結果
弥生時代後期～終末期においては、ある埋葬に副葬される玉類のセット構成は事例によって様々であった。このことから、玉類はセットが流通するというより、パーツとして流通し、各地で装飾品が構成されることが多かったと考えられた。

一方、古墳時代前期においては、銅着色カリガラスの Indo-Pacific Beads のみで構成されるセットや、翡翠製勾玉+半島系管玉で構成されるセットが近畿中核を分布の核としつ広域で見られるようになる。また、近畿中核から配布されたと考えられる三角縁神獣鏡をはじめとする物財との共伴もしばしば認められることが確認された。以上から、この時期の玉類の広域流通の具体像として、装飾品のセットを構成した状態で、銅鏡など他の物財とともに近畿中核から入手されたものと考えられた。

(3) 以上の(1)・(2)の結果、古墳時代の開始とともに、地域社会の側での玉類の入手形態が変化していることが明らかとなった。また、このような変化は、共伴する副葬品からみて、三角縁神獣鏡の配布開始とほぼ連動したものであり、古墳時代の開始とともに、玉類は近畿中核を「中心」とする広域的秩序維持のための「威信財システム」に組み込まれたものと考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

① 谷澤亜里、「古墳時代前期における玉類副葬の論理」、『考古学は科学か：田中良之先生追悼論文集』、中国書店、査読無、下巻、pp.605-623、2016年。

[学会発表](計6件)

① 谷澤亜里、玉類の副葬形態からみた古墳時代の開始、平成27年度九州史学会大会考古学部会、福岡、2015年12月。

② 谷澤亜里、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての九州におけるガラス小玉の出土傾向とその考古学的含意、第1回東アジア装身具ワークショップ、福岡、2015年12月。

③ Gina Barnes, Ari Tanizawa, Early beadstone body ornaments in East Asia and their antecedents 2: Kofun-Nara, 141, 7th Worldwide Conference of the Society of East Asian Archaeology, Boston, USA, 2016.6.

④ 谷澤亜里、弥生時代後半期における玉類の舶載：北部九州のガラス製玉類を中心に、第12回九州考古学会・嶺南考古学会合同考

古学大会、釜山、2016年8月.

⑤ Ari Tanizawa, The importation of glass beads in the Yayoi-Kofun transitional period in Japanese archipelago, The Eighth World Archaeological Congress, Kyoto, Japan, 2016.8.

⑥ Ari Tanizawa, The Yayoi-Kofun transition as seen from the distribution of beads, The Eighth World Archaeological Congress, Kyoto, Japan, 2016.9.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷澤 亜里 (TANIZAWA, Ari)

九州大学・附属図書館・助教

研究者番号：50749471